

江戸女流文学とジェンダー、そして「わきまえる女」(上)

－朝鮮朝女流文学「閨房歌辞」を手掛かりとして－

丁 貴 連

1. はじめに：ジェンダーの江戸女流文学

1. 女性のいない近世史

かつての日本女性史研究においては、江戸時代は男尊女卑の厳しい、女性にとって「暗黒」の時代と見なされていた。文学も例外ではなく、日本の女流文学の伝統は平安時代の最盛期を経て江戸時代には衰退し、明治時代の樋口一葉や与謝野晶子にいたって復活したというのが一般的な見方である¹。

確かに、平安時代の女流文学と聞けば、誰でも『源氏物語』や『枕草子』その他作品名と、作者名が思い浮かぶ。しかし、江戸時代の女流文学と聞いても、すぐに思い浮かぶ作品名も作者名もない。念のために文学史を紐解いてみると、井原西鶴や滝沢馬琴など男性作家の作品や浮世絵の世界では女性たちが目覚ましい活動をしているが、文学を創作する立場の女性たちの姿を見ることができない。文学だけではない。女性たちは芸能の世界からも排除され、美術の分野でも語られることはほとんどない。問題は、こうした見方が男女平等を原則とする教育の現場にも反映されていることだ。

木村涼子は、2008年度版小学校学習指導要領解説社会編で取り上げられている歴史的人物45人のうち、女性は卑弥呼、紫式部、清少納言の3人しか登場していないことを次のように指摘している。

小学校社会科で、取り上げる人物として名が挙げられているのは四五人いますが、そのうち女性は三人しかいません。女性登場率は一割以下です。これでは現行学習指導要領と変わらないのですが、歴史は男性が作ったものだ、誰だって思いますよ。(中略)

それにしても、例えば、天武天皇の皇后で女性天皇となった持統天皇(在位696～697)は、律令制度の基礎となる「大宝律令」を完成させるなど大きな仕事をした人物なのに出不来です

ね。鎌倉幕府を定着させた北条正子も、歌舞伎の創始者出雲阿国も出てこない。さらに、近代になってからは一人も出てこないのは、どういうことでしょう。バランスを欠きますね²。

木村が指摘しているバランスの悪さは、高校の教科書でも確認することができる。【表1】は歴史上の人物のうち、一般によく知られ、13種類以上の高校の日本史教科書に取り上げられている人物を時代別に集計したものである。

【表1】13種類以上の教科書に登場する人物数³

	古代	中世	近世
教科書に登場する人物数	117	111	214
内 男性数	107	108	212
女性数	10	3	2

この表を見て明らかのように、時代と共に登場する男性が増えていくのに対して、女性は減少している。表をまとめた大口勇次郎によれば、古代史では教科書の登場人物の約一割が女性であり、しかも政治や文化の表舞台で大活躍した卑弥呼や推古天皇、紫式部、清少納言らを取り上げられている。中世史では登場する女性の比率は低下したものの、自らの活動によって歴史に名を残した人物として北条正子、日野富子、阿仏尼が取り上げられている。しかるに近世史の場合、女性登場の割合はさらに低下して明治天皇の伯母に当たる和宮(静観院宮)と歌舞伎の創始者出雲阿国の2人がわずかに上がっているだけである⁴。

このように教科書の現状から見ても、古代においては女性の社会的活躍が見られたのに対して、江戸時代になると女性が社会の表舞台から消え去って、まさに「女性のいない近世史」となっている。一般に前近代の社会では女性が社会の表舞台で活躍することが少ないが、江戸時代は他の時代に比べてその傾向が極端に強い。果たして江戸時代は女

流文学者にとって「暗黒」の時代であったのか。答えは否である。

2. 江戸女流文学の「発見」

1980年代に入ってから近世の女性たちが書いた詩歌や日記、随筆、紀行文、物語、絵画などが発掘され、それまで知られなかった江戸時代の女性による著作活動の実態が浮き彫りになったからである。

例えば、門玲子は物語・紀行・日記・評論・漢詩・和歌・俳諧とあらゆるジャンルで活躍していた50余人の女流文学者の作品を分析した『江戸女流文学の発見—光ある身こそくるしき思ひあれ⁵⁾』（藤原書店、1998）を刊行し、「室町期以降、江戸時代には女流作家は出なかった」という日本文学史の一般通念に異議申し立てを行なった。本書は、「紫式部と樋口一葉の間には女流文学者はいなかった」という日本文学史の空白を埋めたと高く評価されている。

創作活動を行っていたのは女流文学者だけにとどまらない。長年に渡って近世の女性たちが書き残した著作の発掘・研究に打ち込んだ柴桂子は1990年、それまで収集した旅日記133点⁶⁾を分析し、庶民の女性にとって旅が「日常」であったことを明らかにした⁷⁾。

周知の如く、江戸時代の女性は、「舅・姑の為に衣を縫い、食を調え、夫に伝えて、衣を畳み、席を掃き、子を育て、汚れを洗い、常に家の内に居て、猥りに外へ出ずべからず⁸⁾（『女大学』）と教えられていた。時代と共に緩やかになったとはいえ、女手形の発行手続きや関所の女改め、女人禁制など、江戸時代はことに女の旅に対しては厳格なのであった。そうした状況のもとで、多くの女性が旅に出るだけでなく、珍しいと思われていた旅日記を、しかもその大半を町民や農民、神官・医者・学者など庶民女性が書き残していたことが、柴桂子の調査によって明らかになったのである。

柴桂子の研究を契機に、日本全国の旧家の蔵や図書館の書庫で虫に食われながら眠っていた女性の旅日記が次々と発掘され、2005年の時点で日記名・筆者・所在のわかっているものは220点⁹⁾に達している。題名は確認できているものの、所在が分からず未だに探し続けているものも多いが、旅日記の発掘と調査は史料不足が嘆かれる女性史・生活史・風俗史などへの史料提供は無論、女性による創作活

動の評価にも新しい視点を切り開くものとして高く評価されている。

実は、旅日記を書き残した女性の中には、日常生活を綴った「家政日記」を書き残した人も少なくない。その一人、下野国宇都宮の豪商佐野屋の分家江戸日本橋「佐孝」の夫人菊地民子は、28歳（1821）の時、夫の許可を得て友人たちと江の島・鎌倉を旅した体験を綴った「江の島の記」を書き残している。その32年後の1853年、59歳となった民子は同年元日から翌年2月1日までの一年間の日常生活を綴った「菊地民子日記¹⁰⁾」をも書き残している。

その内容は日付・天気が始まって、家族と使用人の動向や家の行事、他家及び暖簾内の交際、町内の年中行事などの日常生活の記録に加え、彼女自身の教養生活と趣味生活を示す歌会・茶事・万葉会等の記録と幕末の世相、地震など災害が書き記されている。一年間という短いものではあるものの、民子日記は年間を通じての本店の主婦の仕事と役割は無論、当時の商家の女性の生活様式や考え方、精神世界を知る上で貴重な情報を多く提供していることが、入江宏によって明らかにされたのである¹¹⁾。

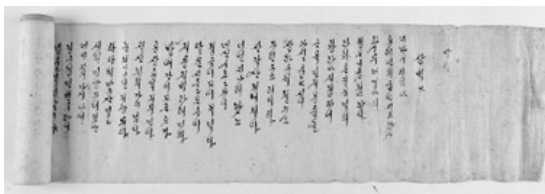
以来、和歌山商家の妻沼野峯の『日知録』（1791・1825）、旗本井関親興の夫人『井関隆子日記』（1840～1844）、相州高座郡羽鳥村豪農の妻と嬪『三鶯はるてい日記』（1848）、和歌山藩校学習館督の妻川合小梅の『小梅日記』（1849～1885）、阿波国藩士の夫人上田美寿の『桜戸日記』（1852～1856）、河内商家の主婦西谷さくの『さく女日記』（1860）、彦根藩武蔵国世田谷領代官の夫人『大場美佐日記』（1860～1903）など、それまであまり知られなかった日本各地に生きた庶民女性の家政日記が相次いで発掘され、2015年の出版当時60編¹²⁾の家政日記の存在が明らかになっている。

これらの日記を読んでまず気づくことは、彼女たちの教養生活と趣味生活の広さである。程度の差こそあれ、江戸時代の女性たちは神官や学者、あるいは豪商・豪農の女性（妻、娘）らしく、和歌や俳諧や漢詩といった詩歌を嗜み、王朝物語から和歌集・俳諧集、歴史書、漢学・漢詩、往来物などの作品を愛読し、いずれも国学者や儒学者や俳諧者らに和歌や俳諧、漢詩の指導を受けて著作活動を行っていた。また、中には女性の詠んだ発句ばかりを集めた俳諧集を編纂して全国の俳諧仲間と交流したり、

万葉集や源氏物語の講釈会に出席したり、漢詩の修業のために江戸へ遊学したりするなど、実に豊かな教養生活、趣味生活を送っていたことが日記から確認できる。注目すべきなのは、このようなハイレベルの知的生活を綴った日記が日本各地で書かれていたということだ。

「三従四徳」を強いられた封建社会では、女は生活に必要な読み・書きはできても、それ以上の学問はいらないということが当然とされ、むしろ「才無きが徳」が女の徳とされていた。そうした現実疑問を抱く女性も少なくなかったが、18世紀に入る頃からの国学の発達も相まって、女性たちが自らの思いを表現するような場面が増えていった¹³。表現の内容や仕方、きっかけは様々であるが、そのような事態が実現せしめるに至った背景には、商品経済の発展に伴って「物かき・算を知らざれば、家の事をしるし、財をはかる事あたはず」（貝原益軒「女子に教える法」1710）と、男女ともにリテラシーが実生活に求められていたからである。その結果、地方都市に暮らす女性たちも読み・書きにとどまらない多様なものを学ぶことができるようになったのである。そして、高い教育を身に付けることが可能となった庶民女性の中からは、主婦の立場から武家（あるいは商家、農家）社会の日常生活や当時の世相を書き記した日記や旅先での体験を書き残した者から、創作欲に駆られて文筆活動を行なった者、女性を取り巻く支配思想としての儒教批判を行なった者、それまで男性のみの教養とされてきた漢詩で自己表現を試みる者などが登場するようになってきたのである¹⁴。

3. 沈黙を破った朝鮮末期の女性たちの声、「閨房歌辞」の存在



【図1】「双壁歌」1794年延安李氏作（礼曹判書李之徳の次女・柳成龍の八世孫柳師春の妻・抄啓文臣柳台佐の母）。閨房歌辞の中で年代の最も古いもの¹⁵。（韓国国文学振興院所蔵）

ところが、同時期の朝鮮時代、とりわけ嶺南地方

（現慶尚北道）の両班家の女性たちも日々の生活から感じる様々な思いを書き残していた。いわゆる「ドゥルマリ（巻物のこと：伝統的に巻物の形で保存されてきた）」、「歌辞¹⁶」とも呼ばれていた閨房歌辞（「内房歌辞」「女性歌辞」とも呼ぶ）なのである。

儒教道徳が絶対の規範であった両班家では女性の地位は極めて低く、女たちは「三従の道」や「七去の悪」、「女必従夫」、「男女別有」といった儒教規範に縛られ、閨房の奥深く閉じ込められて暮らしていた。閨房歌辞はそのような女性の生活と想いを縷々として詠じたものであり、その行間から人間的な解放・自由を求める願望が色濃く滲み出ていることを読み取ることができる。

しかし残念ながら、閨房歌辞は男の目に触れることなく、閨房から閨房へと受け継がれながら独自の発展を遂げてきたその性質故に、嶺南地方以外の地域ではあまり知られてこなかったという事情がある。それが1970年代頃から権寧徹¹⁷により、それまで各家庭で眠っていた閨房歌辞が次々と発掘され、朝鮮時代の両班家女性たちのライフサイクルが知られるようになってきたのである。2019年の時点で5,000件以上¹⁸が報告されているが、それらを一瞥してまず驚くのは、彼女たちの教養の高さである。同時代を生きた江戸時代の女性たちと同じく、朝鮮末期の女たちもその高い教養を駆使し、自分たちが生きていた時代を書き写していたのである。

4. 「わきまえる女」

ただし、男性知識人の庇護の下で著作活動を行っていた江戸女流文学と違って、閨房歌辞は学問や文芸に携わる当時の男性知識人の指導や支援、庇護を一切受けずあくまでも女性同士の間で作品活動が行われていた。この男性知識人の庇護の有無は、当然のことながら彼女たちのジェンダー観に強い影響を及ぼしている。

男性知識人に庇護されて育てられた江戸女流文学者たちは、支配思想であり、女性を男性に従うものと定めた儒教の枠内で執筆活動を行っていた。しかも、彼女たちはこの思想をあまり疑わず枠内に安住し、進んでその枠を補強する役割を担っていてもいたと、門玲子は指摘している¹⁹。

一方、男性の目が届かぬ閨房という閉鎖された空間を背景に文筆活動を行っていた閨房歌辞の作者

たちは、男の目を気にせず、自由な環境で創作・執筆活動が行われた。その結果、発生当初こそ儒教の枠内に生きる女が守るべき規範を教える教訓歌が多く作られたが、次第に女性にのみ強いられた儒教秩序に反抗し、矛盾だらけの社会制度に批判を加えたいわゆる反儒教的な歌辞が多く創作された。これは江戸女流文学には見られない批判精神である。

このように、ジェンダーの視点から江戸女流文学を見ていくと、江戸時代に蔓延っていた暗黙の秩序が浮かび上がってくる。その秩序とは、「三従の教え」など支配思想である儒教規範を守る「わきまえる女」たちは庇護され、異議を唱える女性は「わきまえていない」と処罰されるという社会構造なのである。その端的な例が、江戸女流文学史上唯一支配思想である儒教を正面切って批判した只野真葛（1763-1825）である。

真葛は、儒学や蘭学に造詣の深い仙台藩江戸詰の医師であった父と学問好きな弟、そして国学の歌人荷田蒼生子の影響などで幼い時から学問の世界に親しんだ。10歳で明和の大火を体験した真葛は、災害に苦しむ人々を見て経世済民を志したが、政治に携わることを許されぬ女の身であることを知らねばならなかった。16歳から10年間、仙台藩の奥女中として勤めた真葛は、工藤家を嗣ぐ弟のため、自らの意思に反して36歳に仙台藩士江戸番頭1200石の只野伊賀の後妻となり、一人仙台に赴いた。しかし、生家の弟は儒教的克己心によって無理を重ねた結果、彼女の結婚後9年にして病没した。父と弟、夫を相次いで亡くした真葛は、次第に自分の思いと自分を取り巻く状況とのずれに疑問を抱くようになっていく。生活の不满は、社会への疑問となり、それらの思いを書き記していった²⁰。中でも、55歳の時に著した『独考』（1817）はその代表である。執筆から2年後の1819年、真葛は『独考』を江戸第一の文豪と言われている戯作者滝沢馬琴に送って添削と出版を乞うた。だが馬琴は、その内容が禁忌に触れることを恐れて世に出さなかった²¹。その上に『独考』を徹底的に批判した「独考論」（1819年11月）を書きあげて真葛に送り付け、彼女を沈黙させた。わきまえていなかったからである。

ところが、男性中心主義的な価値観に基づくこの言葉が、東京五輪・パラリンピック大会組織委員会の森喜朗前会長の女性蔑視発言の中で使われて国

内外から注目を集めた。以下は、2021年2月3日、日本オリンピック臨時評議会で述べられた森氏の発言の中で問題となった箇所である。

女性がたくさん入っている理事会は、理事会の会議は時間がかかります。これはラグビー協会、今までの倍時間がかかる。（中略）女性っていうのは競争意識が強い。誰か1人が手を挙げて言われると、自分も言わなきゃいけないと思うんでしょうね。（中略）発言の時間をある程度、規制を促していかないと（中略）私どもの組織委員会にも女性は何人いました？7人くらいかな。みんなわきまえておられて（中略）非常に役に立っております²²。（下線は筆者）

いずれもジェンダーギャップ120位（156ヶ国中、2021年）の日本の現在地を象徴したような発言である。中でも問題なのは、自身がトップを務める大会組織委員会の女性を「わきまえておられて」いると評したことだ。



【図2】森喜朗元首相の「わきまえている女性」発言に抗議し、ツイッターでは「#わきまえない女」というハッシュタグが広がった。（『朝日新聞』2022年2月11日付）

森氏は「女性を蔑視する気持ちは毛頭ない」と釈明したが、この発言から透けて見えるのは、日本社会に根付く男性中心社会の秩序である。森前会長をはじめとする価値観のアップデートをしない男性たちは、江戸時代の男性知識人たちと同じく、わきまえる女性を厚遇する一方、異を唱える女性たちを黙らせた。その結果が、ジェンダーギャップ指数120位なのである。

ここ数年、韓国など諸外国では多様性を尊重し、女性にチャンスを与えようと、具体的な取り組みでジェンダーギャップを縮めている。しかし、日本は逆に順位を大きく後退させている。なぜ、日本は世界のジェンダー平等の流れから取り残されてしまったのか。その要因の一つに、政治的意思の欠落などが指摘されているが、ここで留意したいのは森発言をめぐる、ジェンダー問題に消極的な男性からも疑問の声が多く上がっていたことだ。その背景にあるのは、わきまえているばかりでは日本のジェンダー観はいつまでも世界の恥でしかないという危機意識である。その危機感を高めたという点で、逆説的だが森発言が日本社会に投げかけた意義は大きいと思う。がしかし、森発言からも分かるように、連綿と続いてきた家父長制秩序はそう簡単には変わらない。1990年代後半頃から2000年代にかけて巻き起こったジェンダー・バックラッシュはその典型である。

5. フェミニズムへのバックラッシュをどう変えていくか

バックラッシュ (Backlash) とは、元来はある流れに対する「反動」「揺り戻し」を意味するが²³、この用法を初めて用いたスーザン・ファルデーはその著 *Backlash: The Undeclared War against American Women*, New York: Anchor Books.(1991) で、女性運動や男女平等政策の進展に対する攻撃 (反響、巻き返し、反動、抵抗) の意味として捉えている²⁴。一方日本では、特に1999年の男女共同参画社会基本法の施行とその全国的な広がりにより危機感を抱いた保守勢力が男女共同参画社会の流れを止めようと起こした反フェミニズム運動の総称を指す。

山口智美によれば、バックラッシュの中心となったのは、山谷えり子議員や安倍晋三幹事長代理、石原慎太郎都知事といった自民党や民主党の右派の国会・地方議員に加え、日本会議²⁵に関係する宗教団体や統一教会などの「宗教右派」、産経系の媒体など右派メディアに執筆する学者や評論家、ジャーナリストなど、いわゆる保守系の人たちである²⁶。彼らは1990年代後半以降、とりわけ2000年代に入って男女共同参画社会基本法の自治体レベルでの条例化反対とその妨害、ジェンダーフリー・性教育へのバッシング、選択的夫婦別姓制度導入の反対、従軍慰安婦の否定、活動的なフェミニストへの個人攻

撃など、ジェンダー平等に関わる施策や教育、活動に対して組織的な批判・反撃を展開した。

無論、フェミニズムやジェンダー関係者からも黙っておらず、バックラッシュ派の攻撃に対抗する運動を同時に展開された。しかしその活動は、「“ウソも百編言えば……” 式²⁷」のバックラッシュ派の非論理的で悪意に満ちた攻撃によってかき消されていた²⁸。この時期、特にバックラッシュが活発であった1998年から2007年までの10年は、フェミニズムでは『フェミニズムの『失われた時代』²⁹ (山口智美・斎藤正美・萩上チキ、2012)、「日本の女性学において『失われた10年』³⁰」(石橋、2016)と見なされている。それほどフェミニズムに対するバックラッシュの攻撃が強力であったと言えるが、中でも特に問題なのは、森喜朗前会長の「わきまえる女」発言から分かるように、声を上げる女性への嫌がらせやバッシングである。

なぜ発言する女性は叩かれるのか。その核心にあるのがミソジニーである。政治学者三浦まりは、ミソジニーは女性嫌悪とか女性憎悪と訳されることもあるが、「女性処罰」と言った方が日本語の語感としてはしっくりくと、日本におけるミソジニーの実態を次のように述べている。

男性の領域に侵入し、男性の特権的地位を脅かし、家父長的な価値構造を転覆させかねない女性を処罰する動機がミソジニーだ。

正々堂々と持論を述べられるという行為も、「女らしさ」の規範から逸脱し、処罰の対象となる。政治家として権力を行使することも、あってはならないこととされる。家父長的な価値構造で認められた女性としての役割を決して超えることのない女性だけが、政治家として若干名の参加を許される。女性はその矩をこえた途端に制裁を加えられるのは、身の丈を思い知らせ、女性の領域へと撤退させるためである³¹。

氏によれば、ミソジニーはまさしく「わきまえない女」への「むち」なのである。森前会長は、「私どもの組織委員会の女性」は「みんなわきまえておられて(中略)非常に役に立っています」と「わきまえる女性」たちを褒め称えていたが、その発言から透けて見えるのは、女に「わきまえる」ことを強いる日本社会の構造的ジェンダー不平等である。もの言う女性を排

除する社会風潮を変えるためにはどうすべきか。これまで声を上げてきた女性たちと連携し、そこから行動すべきだという指摘もあるが、筆者はその起源を、江戸時代の女流文学者たちにまで遡りたい。

江戸時代は、女性の地位がもっとも低下した「日本女性史における暗黒時代」(井上靖・高群逸枝)であったとされている。世界的にも、近世は女性の主体性を無視し、家父長たる男性への絶対的服従を強いる家父長制社会であった。そんな社会のあり方に疑問を抱く女性も少なくなかったが、18世紀に入ると、欧米を中心に啓蒙思想(日本や朝鮮では国学、実学)が広がり、高い教養を身に付けた女性たちが、家父長的女性抑圧の状況に対して、女の立場から声を上げ始めた。例えば、フランスのオランプド・ゲージュ『女権宣言』(1791)、イギリスのメアリ・ウルストンクラフト『女性の権利の擁護』(1792)、近世日本の只野真葛『独考』(1817)、朝鮮時代の閨房歌辞などはその代表である。これらの作品はいずれも支配的イデオロギーに挑戦し、家父長制の前提を揺さぶっていた。この彼女たちの批判精神がやがて、女性解放を求める運動と合流して、社会の前面に登場するようになるのである。

ところが、江戸時代の日本では只野真葛を除く、他の女流文学者たちには朝鮮や欧米の女流文学者に見られるような批判精神はあまり見られない。その理由は他でもなく、同時代の朝鮮や欧米の女流文学者たちが男性の目が届かない閨房、あるいは母の主催するサロンで育ったのに対して、江戸女流文学者たちは父など身近な男性の薫陶を受け、さらに男性の師匠に従って教育を受けていたからである。

周知の如く、江戸時代の学問の主流は儒教である。武士や儒学者は無論のこと、只野真葛の『独考』を批判した馬琴のような町人出身の男性知識人たちがまた儒教に基づいたものの考え方をしていた。彼らにとって儒教は絶対的なものであったが、その指導を受けていた江戸女流文学者たちは、幼い頃から儒教の学習と実践に努めていた。それ故に、彼女たちはたとえ家父長たる男性への絶対的服従を強いる儒教社会に疑問があっても表立って異議を唱えず、儒教の枠内に安住し、進んでその枠を補強する役割を担っていた³²。つまり、江戸女流文学者たちは儒教秩序との対立を避けて「わかまえていた」のである。

この「わかまえる」態度こそが、彼女たちの作品

世界を著しく狭めていたのは言うまでもないが、だからといって、彼女たちも黙っていたわけではない。そこで本研究では、朝鮮時代の「閨房歌辞」を手掛かりに、男性知識人の思想や教えを受け継ぐことが表現になっていたとされる江戸女流文学が如何にして主体性を獲得していたかを明らかにし、日本社会に根を張ってきた「わかまえる」という暗黙の秩序について考える契機にしたい。

Ⅱ. 教育の成果としての江戸女流文学

1. 女訓書の編纂と女子教育

平安女流文学全盛時代を経て鎌倉、室町、江戸へと時代が下るにつれて、女は物を書かず、女性には学問は要らないという風潮が幅を利かせるようになっていく。その風潮を広めたのはほかでもない、江戸中期から女子教育に使われていた女訓書なのである。

しかしながら、女訓書の嚆矢といわれる貝原益軒は、一人前の女として認められるために必要な「三従四徳」を強く主張する一方、「女子に教ゆる法」第7条(『和俗童子訓』1710)の中では、

七歳より和字をならわしめ、又おとこもじをもならわしむべし。淫思なき古歌を多くよましめて、風雅の道を知らしむべし。是また男子のごとく、はじめは数目ある句、みじかき事ども、あまたよみおぼえさせて後、『孝経』の首章、『論語』の学而篇、曹大家が『女誡』などをよましめ、孝順・貞・潔の道をおしゆべし。十歳より外にいださず、閨門の内にのみ居て、織り・縫い・紡み・績ぐわざをならしむべし。(中略)、

女子に見せしむ草子も、ゑらぶべし。いにしへの事、しるせたるふみの類は害なし。又、伊勢物語、源氏物語など、其詞は風雅なれど、かやうの淫俗の事をしるせるふみを、はやく見せしむべからず。また、女子も物を正しくかき、算数をならぶべし。物かき・算をしらざれば、家の事をしるし、財をはかる事あたはず。必ずこれをおしゆべし³³。

(下線は筆者)

と、学問的基礎においては男子との違いをおかず、むしろ女子にも「おとこもじ(漢字)」と「いにしへ事、しるせるふみ」(歴史)を学ぶことを説いていた。

その結果、江戸後期になると『江戸時代女流文学全集・全4巻³⁴』（古谷知新編、1918）、『女流著作解題³⁵』（女子学習院編、1939）、『近世女流文人伝³⁶』（会田範治編、明治書院、1960）などに見られるように、支配者層から地方に暮らす庶民層に至るまで身分の異なるあらゆる階層の女性たちが著作活動を行っていた。

中でも注目したいのは、女子学習院が編纂した『女流著作解題』（凸版印刷株式会社、1939、非売品）である。本書には第一編「和歌」、第二編「俳諧」、第三編「物語・随筆・詩文・研究・其他」などの各分野にわたって、皇室関係女性30人（作品29）と一般女性約2500人（作品760余）の計2530人の著作者名と789編の書名が紹介されている³⁷。長い空白の時代と見られていたこの時期に、多くの女性による著作活動が活発に行われていたことに驚きを禁じ得ないが、それにも増して驚くのは、平安女流文学に比べて文学のジャンルが多様かつ拡大されていったことである。

2. 自己表現としての著作活動

【表2】は、桑原恵が『女流著作解題』にあげ

られている著作のうち、江戸時代に書かれたものを分野別に分けて集計したものである³⁸。この表を見て明らかなように、江戸時代を通じて作品数が最も多い分野は新興文芸である俳諧（114）である。次に平安女流文学以来の伝統的な和歌（86）、日記・紀行（67）、物語（46）が続く。日記と紀行を合せて集計したのは日記としてあっても多くは旅日記であり、家を離れて生活した時の、いわば非日常的な出来事を綴ったものがそのほとんどだからである。物語の46編が目されるが、そのうち42編は荒木田麗女の擬古物語であり、1人の著者による多作という状況を考慮すれば、漢詩の13編は4番目に多い分野として注目に値する。

1) 漢詩に挑む女性たち

江戸女流文学がそれ以前のものとは大きく異なる点は、女性の漢詩人を輩出したことだと言われている³⁹。周知の如く、平安時代には唐ぶみ（漢詩文）は男性もの、仮名ぶみ（和文）は女性のものでされていた。その意味において、江戸時代は文芸におけるこの伝統的なジェンダーの一つが、実質的に崩れ去った時代であったと言える。江戸後期になって女性漢

【表2】江戸時代の女性の著作活動

分野	年代							計
	1600-1710	1711-1750	1751-1788	1789-1829	1830-1867	不明		
和歌	2	12	9	14	21	28	86	
俳諧	9	11	27	49	17	1	114	
日記・紀行	3	11	17	17	14	5	67	
漢詩	3	-	-	2	3	5	13	
狂歌	-	-	-	1	-	-	1	
女訓書	4	-	1	1	-	4	10	
教科書	-	3	-	-	-	-	3	
教訓書	-	-	1	-	1	-	2	
論説	1	-	-	1	-	1	3	
随筆	-	-	-	2	-	2	4	
物語	-	-	39	1	-	6	46	
歴史物語・記録・回顧録等	1	-	4	1	1	2	9	
説話集	-	-	1	1	-	1	3	
物語研究	-	-	-	-	-	1	1	
数学書	-	-	1	-	-	-	1	
伝記	-	-	-	-	1	1	2	
書簡集	-	-	-	-	-	1	1	
計	23(1)	37(5)	100(10)	90(12)	58(3)	58(1)	366(32)	

（出典：桑原恵「近世的教養文化と女性」（『日本女性生活史 3 近世』東京大学出版会、1998）

・【表2】は女子学習院が編纂した『女流著作解題』に挙げられている作品のうち、近世に書かれたものについて和歌・俳諧などの分野別にその件数を取り出し、さらに5つの時代に分けて集計したものである。

・『女流著作解題』に取り上げられている著作は慶長から明治までの間のもの、作者は大正年間に没した者までがその対象となっている。

・本調査では、庶民の知識人層の女性の実像に迫るために皇族・公家・大名の女性の著作は除外している。

・下段の「計」のうち（ ）内の数字は、1つの著作が2分野に渡っているものを示す。

詩人の活躍が見られるようになったのは、時代の趨勢と無関係ではない。

門玲子が指摘するように、江戸中期ごろまでは唐詩を手本とする格調派の漢詩が多く作られていた。やがて宋詩のように日常生活に題材をとり、分かりやすい言葉で実情・実感を詠まねばならないという新詩運動が起こって多くの詩人の心を捉えた。文字を読み書きできる人が増えるにつれて、漢詩文の古典を読みこなし、指導者について作詩する人々ができた。この機運は全国の富裕な庶民層・農民層にも及び、女性の中にも多くの参加者を見たのである⁴⁰。



【図3】「白鷗社集会図(1882)⁴¹」上方中央の総髪が梁川星巖。前方中央の女性が江馬細香、右端が星巖の妻張紅蘭。(原図 江馬家蔵)

【図3】は、江戸後期に活躍した美濃の女流漢詩人江馬細香が、梁川星巖・村瀬藤城ら漢詩文仲間と結成した詩社「白鷗社」の集会の様子を文政5(1822)年に描かせたものである。白鷗社は毎月1回大垣伝馬町の実相寺にて詩文を講究したが、この絵は長い間男性が独占してきた漢詩文の世界に、多くの女性が進出し、男性知識人と交わりながら著作活動を行っていたことを雄弁に物語っている。

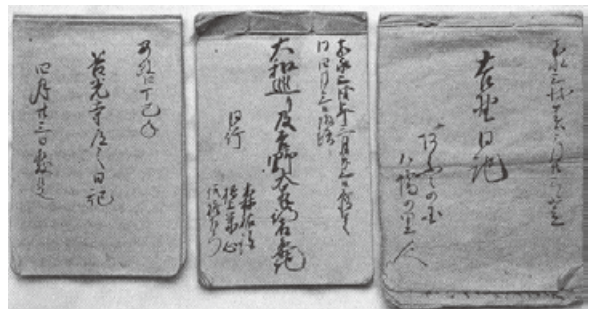
2) 旅日記を綴る女性たち

平安時代の女流文学以後、つくり物語、いわゆる「小説」分野では女性の作品で特筆すべきものはあ

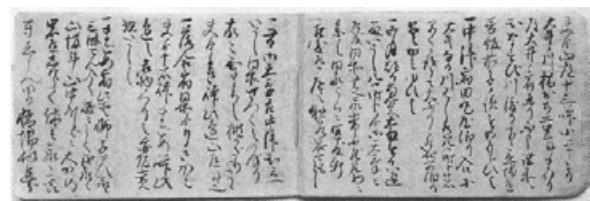
まりない。しかし、「近世は漢詩と同じく文章の時代でもある⁴²」と言われているほど、江戸時代の女性たちは日記、紀行文、随筆、記録・回顧録、伝記、論説など数多くの作品を残している。中でももっとも多いのは紀行文(旅日記)である。【表2】で集計された67点に、さらに柴桂子らによって発掘された旅日記を加えると、その数は300点近くなる。

女性が旅日記を書くことは、近世以前にはごく限られた階層の人たちであった。代表的なものとして、菅原孝標女『更級日記』、阿仏尼『十六夜日記』、後深草院二条『よはずがたり』などが挙げられるが、いずれも筆者は貴族階級か、宮廷、権門に仕えた才能のある女性である。

ところが、江戸時代になると、旅をする女性たちの書いた日記が、急速にその数を増していった。【表2】に明らかなように、江戸初期には女性による旅日記はそれほど多くない。しかし、全国的に交通網や宿駅が整備され、以前にもまして旅行がしやすくなる江戸後期になるにつれて、庶民の間に旅が大流行し、女性たちもそのブームに加わるようになったのである。しかも、彼女たちはただ旅に出るだけでなく、その体験を書き残した。



【図4】近江商人の妻祐清尼の旅日記『善光寺道之日記』、『大和巡り及び吉野大峯行者参記』、『吉野日記』の表紙⁴³(近江八幡市立資料館蔵)



【図5】『善光寺道之日記』の本文(近江八幡市立資料館蔵⁴⁴)

残された旅日記を読んで改めて思うのは、旅日記の著者たちは自己の体験を文に綴るにふさわしい学

問的な素養を身に付けていた人々だったということである。長年に渡って旅日記の発掘・研究に打ち込んだ柴桂子は、旅日記は文芸史の上でも注目すべき史料であると次のように高く評価している。

江戸期の約三世紀の間に書き残された行動の記録は、その時代として世界的に見ても稀有なものと言えるのではなからうか。

さらに付け加えれば、女たちが書き残した紀行文、旅の中で詠まれた詩歌、描かれたスケッチは、当時の女たちの文芸力・表現力を示すものであり、文芸史の上からも十分評価できる⁴⁵。

事実、【表 2】の上でも、旅日記は近世女流文芸の中心をなす分野として、俳諧・和歌に次ぐ位置を占めている。

3) 社会のあり方への疑問を記す女性たち

作品の数は少ないが、論説(3)や物語研究(1)、数学書(1)といった研究書が執筆されていたことも興味深い。これらは一般的な女性の教養としてとらえることはできないであろうが、女性にもその能力の如何によっては、論説や数学書をまとめるだけの学問を身に付けていることが表から読み取れる。中でも、論説3編のうち2編は注目に値する。その2編が「はじめに」で述べた只野真葛によって書かれた『独考』(1817)と『キリシタン考』(写年不詳)だからである。

前述のように、『独考』は当時の支配思想である儒教倫理に疑問を呈した長編評論である。一方『キリシタン考』は、キリスト教を邪法とし、キリスト教が渡来してからのちは、「日本心消ると知るべし」とする立場を短くまとめたものである。従来、女性の手になる文章は政治・社会・人間の在り方に触れるものは少ないが、真葛はそれらの問題に正面から取り組んだ、江戸女流文学者の中では極めて珍しい存在と評されている。

「はじめに」で指摘したように、「室町期以降、江戸時代には女流作家は出なかった」というのが一般的な見方である。だが【表 2】で見ると、江戸時代の女流文学者たちはそれぞれの置かれた状況と立場の中で懸命に著作活動を行ない、俳諧や漢詩、論説など新しいジャンルの作品を創出している。

それらの作品が日本女性文学史に大きな足跡を残していることはこれまで見てきたとおりである。

しかし残念ながら、彼女たちの著作は目立たずに、ほとんど知られていない。なぜ江戸女流文学は注目されなかったのか。『女流著作解題』を編纂した女子学習院長長屋順耳の次の言葉は示唆に富む。

近代本邦女流の著作は、其の数尠からずと雖も、女子謙讓の徳の致す所、概ね秘封して広く世に知られず、漸く湮滅し去らむとする頃あり。故に本院は昭和十年十一月十三日、開校五十周年に当たり、記念事業の一つとして、これが搜索蒐集と其の解題とを試み、将来女子教育に資せむことを企て、大方に資料の提供を懇請し、お本院国語教官に之が編纂を委嘱せり⁴⁶。(下線は筆者)

つまり、江戸女流文学が世に知られなかった最大の要因は、女性の「謙讓の徳」が災いとなったからである。

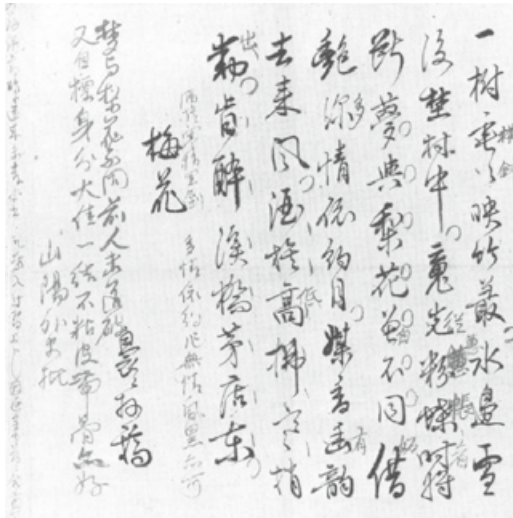
すでに述べたように、貝原益軒は女性でも漢字の素養を身に付けることを奨励していた。しかしながら、女訓書ではそれらの知識はあまり披露すべきではないことが説かれており、女性は仮名書きを使用することが常識とされていた。つまり、教養は持っていたとしても、それを社会に公表してはいけないし、表現するときでも、文章の形式に大きな制約をかけられていた⁴⁷。その結果、女性の著作が刊行されることはほとんどなく、多くはその家にもみ伝えられ、世に知られることが少なかったのである。

だからといって、学問・文芸に携わる当時の男性知識人たちは、女流文学者を蔑視、あるいは無視していたわけではない。男性知識人はむしろ女性たちの文芸活動を、好意的に指導、庇護、支援していた⁴⁸。

3. 男性の庇護の下で

1) 女流文学者を支える男性知識人の姿

その実態を、前述の江戸後期に活躍した女流漢詩人江馬細香から見ていく。細香は大垣藩の医師江馬蘭齋の長女として1787年、美濃大垣に生まれた。父蘭齋は漢方医であったが、46歳の時に蘭学を学び、美濃蘭学の基礎を築いた。漢学にも深い造詣があり、漢詩を作ることを好んだ。細香はこの父から漢詩・絵画の手ほどきを受けた。



【図6】 頼山陽が朱筆添削した江馬細香の詩稿⁴⁹
(原図 江馬家蔵)

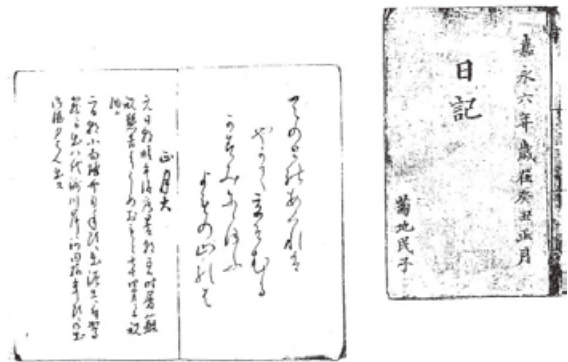
1813年、京都に住む漢学者・詩人頼山陽が地方遊歴の途中、江馬家を訪ねると、細香の父蘭斎は彼を大いに歓迎し、娘の細香を引き合わせてその弟子として入門させた。師弟の関係を結んだ細香と山陽の間には恋愛感情が芽生えたが、蘭斎の反対で結婚には至らず、細香は心ならずとも生涯未婚のまま過ごすことになる。しかし、以後山陽の死に至るまで20年近くの間、師弟としての二人の交流は変わらず続けられた。この間、細香は詩稿や書画を山陽に許に送り、書簡を往復して教えを受けたほか、上京して直接指導を受けている。【図6】は、山陽が朱筆添削した江馬細香の詩稿の一つであるが、江馬家には山陽の朱や評語の入った詩稿がたくさん伝えられている⁵⁰。

このように、細香は学問好きな父の理解の下でよき指導者に巡り合い、漢詩の制作に励んだ。その結果、長い間男性知識人に独占されてきた漢詩の世界の中に自己の活動の場を確立することができたのである。これは何も江馬細香一人に限った話ではない。同時代に活躍していた張紅蘭や原采蘋、亀井小槩ら女流漢詩人たちも細香と同じく父や夫などの身近な男性の薫陶を受け、漢詩文を作っていた。無論、男性知識人の庇護を受けていたのは女流漢詩人だけではない。俳諧や和歌など他の分野に進んだ女流文学者たちが、いずれも父親や夫、兄などの近親者の男性の影響でその道に入っていたことは周知の事実である。また、男性知識人たちも女性の弟子を積極的に受け入れ、その指導を惜しまなかった。

しかし、そのことは同時に彼女たちの視野を限定させてしまうことにもなったが、これについては第4章で述べることにする。

2) 商家夫人、菊池民子の教養生活

このように見てくると、江戸時代の知識人女性の側には必ず支援する男性知識人の姿が見られるが、実は地方都市に生きる一般女性にも同様のことが指摘である。その一端を、前述の下野国宇都宮豪商佐野屋の分家江戸日本橋呉服問屋「佐孝」、佐野屋孝平兵衛知良の妻菊池民子の日記から見ていく。



【図7】 菊池民子の日記「表紙」と「書き出しの部分」⁵¹
(菊池家蔵)

菊池民子の父は、宇都宮寺町(宇都宮市)の豪商佐野屋菊池治右衛門孝古である。菊池家は、19世紀初頭から十代孝古の代に、遠隔地へも商圈を広げ、最盛期には関東一带に50軒余の別家・孫別家をもつ豪商に発展した⁵²。民子は、医家大橋家から迎えた養子孝平兵衛知良の妻となり、文化11年(1814)孝平兵衛が、江戸日本橋元浜町に出店を開くにあたってともに江戸に出た。以後、彼女は大店の主婦として生涯を送ったが、残された日記は嘉永6年(1853)1年分のみで、民子が59歳、夫孝平兵衛知良が急死した年である。

日記には、日付、その日の天候、家族・使用人の動向、祭祀、法事、寺社参詣、他家との交際、町中行事などの日常生活の記録のほか、民子自身の教養生活・趣味生活を示す歌会、茶会などの記録、さらに黒船来航⁵³など庶民の目を通して幕末の世相などが簡潔に記されている。

近世後期の豪商の婦人が、その富の力を背景に豊かな趣味生活を営んだことは広く知られるところで

あるが、菊地民子の日記はそれがなみなみならぬものであったことを伝えていると、入江宏は指摘している⁵⁴。少し長くなるが、19世紀当時の江戸在住の商家女性の日常生活の一端を知る上で貴重な史料なので煩瑣をいとわず、正月1ヶ月間の日記の中で教養・趣味に関する箇所をすべて取り上げる。

- 3日：気陰、旦那吉原へご遊行、介司も年始仕舞同遊行、磯辺真記年始ニ来ル。万葉会読はしめ
- 10日：同暖気、おさと年始ニ出ス。松村町油町両家へ有合品遺ス、いよ橋様并ニ相田様来り給ふ、歌よむ
- 11日：雨天、おすま様茶発会ニ而梅同道、金百疋両銘ニ而持参、福田も香会の所雨天故不参、肴代百疋贈ル
- 13日：天気陰、平野万葉発会ニ而参、小鯛到来の品遺ス、元敬様方へ餅菓子持参
- 19日：晴天、吉田先生発会草かやに有、金百疋持参、夕刻帰、いよ橋様相田様同道ニ而かへる、余寒強し、むら松町ニ而も発会ニ而赤はん来ル、多喜様方御文あり、蒸菓子一折硯一面到来
- 20日：晴天寒さ同強し、村松町へおその来ル、おうめ誠杯ニ而行、茶のおさらひいたす、佐野来ル
- 21日：終日曇り夕刻方雨降、浅次郎来ル、心学初メニ而夕飯出ス、茶んむし焼さかな志るこ也、夜中 まで雨降寒さゆるむ
- 23日：晴陰、福田歌香会ニ而民梅誠同道
- 26日：雨天、おすま様方茶事は有、おうめ亭主の所風邪ニ而民替り勤ム、金五拾疋濃茶代、外に月並同五拾疋参人分持参
- 29日：晴陰、矢倉ニ而歌会催ス、午後方雨降、半香子招ク、采泉様ニ而恵贄あり、夜に入雨愈々つよし
- 晦日：天気晴陰、福田に万葉会読有、宇都宮方利兵衛来ル⁵⁵（下線は筆者）

このように、民子は歌会、茶会、香会、そして「万葉会読」、「心学」と1ヶ月30日のうち実に11日も教養、趣味的会合に出席している。正月は初釜など新年を迎えての発会が多いのでそれを考慮するとしても、決して少なくない回数である。夫の死とその

数の数カ月を除いた8ヶ月の教養記録日数を計算すると、月平均11日ほど各種会に出席している。最も多いのが歌会33回、次いで茶会15回、香会12回、心学7回、野之口講釈7回、万葉集会読4回、源氏物語講釈1回、吉田講釈1回、楽焼9回となっている。

この数字を見るだけで、彼女が如何に精力的に学問と教養に関わってきたことがよくわかる。民子は歌集『倭文舎集』（1858）を作るほど作歌活動にも励んでいたが、日記には「吉田先生」（1月19日）と「野之口先生」（廿一日：晴陰、福田方に野之口先生来而講釈有之ニ付、民琴水様同道ニ而参：3月21日）の名が見える。この二人は国学系の歌人である吉田敏成と野之口隆正であるが、和歌や俳諧の道に進んだ女流文学者たちと同じく、民子も男性の師匠に従って学び、その歌風を受けついていたのである。しかも、豪商の妻らしく、国学系の歌人として当代一流の人物を師匠にしていた。

注目されるのは4回出席した「万葉会読」である。民子は奈良時代の歌集『万葉集』に親しみ、その内容を深く理解するために、相当の学力を必要とする「会読」、すなわち研究会に参加していたのである。「源氏物語講釈」にも1回出席しているが、これは民子の教養が一般女性の水準をはるかに抜いていることを意味する。その教養を彼女はどこから手に入れたのであろうか。

入江宏は、「夫の影響によるものか少女時代からの学問によるものなのか不明である」としながらも、儒学に親しみ儒家と交遊の多い夫の理解が彼女の教養生活の大きな支えであったことは事実であろうと指摘している⁵⁶。民子の夫の生前の言行を記録した『淡雅行実』（成立年不明）によれば、

家道ヤ、盛ニナリタル後ハ、儒家数人ニ交リテ、業暇ニ読書ヲ勤ラレ、又臨池ノ技ヲ好ミ、古書画ヲ愛シ、鑑定ヲ能クセラレシカバ、文人墨客モ常ニ親シク往来セル者、指ヲ屈スルニ違アラズ。（中略）其中儒家ニテハ、山口菅山・塘它山・関藍梁等殊ニ親シク、書画家ニテハ、大窪天民・立原杏所・巻菱湖・小山霞外・渡辺華山・高久靄崖・椿・山・大竹蔣塘・安西雲煙・相沢石湖 中沢雪城・山内香雪ナド。格別ニ親交ノ人々ナリ⁵⁷

と、彼が儒学や詩文書画に堪能な当代一流の文人墨客と交流した相当の教養の持ち主であったことが知られる。

佐藤温によれば、民子の夫は商家佐野屋を大店へと急成長させた人物として知られるが、その傍ら儒家塘它山に師事して学問を修め、松崎慊堂が「佐野屋幸兵衛、浜町蔵書家」と注目する存在でもあった。さらには書家・書画収集として一名を成し、当時の文人人名録に度々登場する人物であった⁵⁸。その庇護と理解の下で、民子は豊かな教養生活を送ることができたわけである。

以上のように見てくると、江戸時代の女性たちの多くは父や夫、兄などの身近な男性にその才能を見出され、育てられている。さらに師を選んで指導を受ける。その指導者はたいてい周囲の男性か、それに連ねる人々から選ばれているという構造が浮かび上がってくる。なんと素晴らしい育て方であろうと思うが、果してそうであろうか。手厚い支援を受けるからこそ、その支援者の思想や価値観、考え方に従わねばならないという暗黙の秩序を指摘せずにはいられないのである。

(次号に続く)

¹ 日本文学研究者の松村定孝は、1980年7月30日、公益財団法人山人会主催夏季セミナーで行なった特別講座「一葉を生んだ土壌=近代女流文学の流れ」(『会報第49号』所収)の中で、「平安時代に紫式部の『源氏物語』が書かれてから、約1000年の空白があって、女流作家に樋口一葉が出た。その間に健礼門院右京大夫の歌集や後深草「ごふかくさ」、院に仕えた二条の「どはずがたり」があるが、室町期以降、江戸時代には女流作家は出なかった」と語っている。

² 木村涼子「ジェンダーの視点から読み取れるもの」(竹内常一・子安潤ほか『2008年度版学習指導要領を読む視点』現代書館、2008)55頁。

³ 大口勇次郎『女性のいる近世』(勁草書房、1995)4頁。

⁴ 大口勇次郎(1995)4頁。

⁵ 門玲子氏は、本書のベースとなる「江戸女流文学史の試み」(福田光子編『女と男の時空【日本女性史再考IV爛熟する女と男一近世】藤原書店、1995)を1995年に発表している。

⁶ 柴桂子「旅日記から見た近世女性の一考察(近世女性史研究会編『江戸時代の女性たち』吉川弘文館、1990)。

⁷ 藪田貫『日本近世史の可能性』(校倉書房、2005)141頁。

⁸ 「女大学宝箱」(石川松太郎編『女大学集』東洋文庫、1977)。

⁹ 柴桂子『近世の女旅日記事典』(東京堂出版2005)1頁。

¹⁰ 菅原雪枝「女の史料『菊地民子日記』」(『江戸期おんな考六』収録、1995)。

¹¹ 入江宏「近世商家の主婦の教養生活—江戸木綿問屋「佐孝」の妻女の日記」(『北海道教育大学人文論究』27号、

1967)。

¹² 柴桂子監修『江戸期おんな表現者事典』(現代書館、2015)参照。

¹³ 菅野則子「近世の女性」(脇田晴子他編『日本女性史』吉川弘文館、1987)154頁。

¹⁴ 関民子「自立への動き」(脇田晴子・林玲子・水原和子編『日本女性史』吉川弘文館、1987)173—175頁。

¹⁵ 権寧徹(『閨房歌辞 各論』榮雪出版社、ソウル、1986、70頁)によれば、「双壁歌」は婚家の祖先文忠公(柳成柳)の遺功に対して国王から賜った恩典への感謝と、長子とその従兄が揃って科挙に及第した喜びを詠じたものである。

¹⁶ 歌辞とは、三四調または四々調の、散文的内容をも持った長文の詩歌形式の一つである。日本の5・7、5・7と続く長形に匹敵する詩の形式と相似している。

¹⁷ 権寧徹は、1956年から15年間にわたって各家庭で眠っていた閨房歌辞を発掘・収集し、1971年に博士論文として公表した。

¹⁸ 李正玉「内房歌辞の記録遺産の価値」(韓国国学振興院『記録遺産登録のための『内房歌辞ワークショップ』結果報告書』2019年6月)。

¹⁹ 門玲子(1995)145頁。

²⁰ 門玲子『わが真葛物語—江戸の女流思索家探訪』(藤原書店、2006)、関民子『只野真葛』(吉川弘文館、2008)参照。

²¹ 関民子(2008)参照。

²² 「森会長の女性に関する3日の発言(要旨)」(『朝日新聞』2021年2月5日付け)27面。

²³ 鈴木彩加『女性たちの保守運動—右傾化する日本社会のジェンダー』(人文書院、2019)69頁。

²⁴ スザン・ファルーディ著、伊藤由紀子・加藤真樹子訳『バックラッシュ—逆襲される女たち』(新潮社1994)18-19頁。

²⁵ 日本会議：日本最大の保守談大。「美しい日本の再建と誇りある国づくりのために、政策提言と国民運動を推進する民間団体」。

²⁶ 山口智美・斎藤正美2000年代『バックラッシュ』とは何だったのか(『エトセトラ 特集女性運動とバックラッシュ』4号、etc.books、2020)。

²⁷ 和田悠・井上恵美子「1990年代後半～2000年代におけるジェンダー・バックラッシュの経過とその意味」(『多文化共生・コミュニケーション論叢』6巻、2011)。

²⁸ 浅井春夫・北村邦夫・橋本紀子・村瀬幸浩『ジェンダーフリー・性教育バッシング ここが知りたい50のQ & A』(大月書店、2003)3頁。

²⁹ 山口智美・斎藤正美『社会運動の戸惑い フェミニズムの「失われた時代」と草の根の保守運動』(勁草書房、2012)。

³⁰ 石橋『ジェンダー・バックラッシュとは何だだったのか—史的総括と未来へ向けて』(インパクト出版会、2016)9頁。

³¹ 三浦まり「政治を女性たちの手に取り戻すための3つの方法」(『エトセトラ 特集：女性運動とバックラッシュ』etc.books、2020年11月)。

³² 門玲子(1995)145頁。

³³ 貝原益軒 卷之五 女子に教ゆる法(『和俗童子訓』)(中村学園大学・中村学園大学短期大学部図書館 貝原益軒アーカイブ)。

³⁴ 『江戸時代女流文学全集』には、平安女流文学以来の伝統である和歌、日記、随筆、物語類、他に江戸時代の新興文芸といえる俳諧の諸作品が収められている。1巻から3巻までは戦記物・紀行文・日記・歴史物語・作り物語・

随筆・記録・手紙を収録。作者名は理慶尼・井上通女・正親町町子・荒木田麗女・只野真葛・白川拍子武女・鶴殿餘野子・野村望東尼その他である。第4巻は和歌・俳諧・狂歌を収めている。和歌の作者は井上通女・祇園梶女・百合女その他の歌集、俳諧の作者は秋色・園女・智月尼・捨女・千代尼・その他の句集、狂歌の作者は智恵内子・節嫁々である。

- ³⁵『女流著作解題』は、近世初期から明治末年までの女性著作を、皇室編、第一編「和歌」、第二編「俳諧」、第三編「物語・随筆・詩文・研究・その他」に分け、著作者名・書名を見出し項目としてそれぞれ著作者の略歴と著書の解題（成立事情・梗概その他）を行なったものである。
- ³⁶『近世女流文人伝』には漢詩、和歌、俳諧の著者80人とその作品が紹介されている。
- ³⁷前田淑『江戸時代の女流文芸史—地方を中心に』（笠間書院、1998）5頁。
- ³⁸桑原恵「近世的教養文化と女性」（『日本女性生活史 ③ 近世』東京大学出版会、1998）180頁。
- ³⁹鈴木よね子「近世女性文学の概観」（『日本女性文学大事典』日本図書センター、2006）354頁。
- ⁴⁰門玲子『江戸女流文学の発見—光ある身こそくるしき思ひあれ』（藤原書店、1998）213頁。
- ⁴¹門玲子（1998）裏表紙。
- ⁴²鈴木よね子（2006）357頁。
- ⁴³前田詠子『近世女人の書』（淡交社、1995）162頁。
- ⁴⁴前田詠子（1995）164頁。
- ⁴⁵柴桂子『近世の女旅日記事典』（平文社、2005）2頁。
- ⁴⁶長屋順耳「序」（女子学習院編『女流著作解題』1939）1頁。
- ⁴⁷桑原恵（1990）。
- ⁴⁸門玲子（1998）144頁。
- ⁴⁹前田詠子（1995）117頁。
- ⁵⁰前田詠子（1995）116頁。
- ⁵¹菅原雪枝（1995）150頁。
- ⁵²入江宏（1967）。
- ⁵³黒船来航（1853年）に関する記録は6月10日付、15日付、25日付に記されている。同様の記録は、和歌山藩儒者川合豹蔵の妻川合小梅（1804～1889）の『小梅日記』（6月17日付）と、阿波国藩士の妻上田美寿（1783～1857）の『桜戸日記』（2巻6月24日付）にも見られる。
- ⁵⁴入江宏（1967）。
- ⁵⁵菅原雪枝（1995）133-134頁。
- ⁵⁶入江宏（1967）。
- ⁵⁷菊池教中『淡雅行実』、ただし佐藤温「富商大橋淡雅の文事と時局」（『近世文藝』86号、2007年7月）から再引用。
- ⁵⁸佐藤温「富商大橋淡雅の文事と時局」（『近世文藝』86号、2007年7月）。

（2022年6月1日受理）